

神奈川のあれから】砂浜細り、迫る高波の脅威—西湘海岸、募る住民の不安

7/2(木) 14:00 配信 2020.07.03(FRI)copy

湘南の海辺が高波のリスクにさらされている。象徴である砂浜が戦後の長期的な浸食で徐々に失われ、近年相次ぐ台風の被害を防ぎきれない。10年余り前の台風禍で大規模に崩落した西湘バイパス(全長約21キロ)は、その後も2017年の台風21号や19年の台風19号などで繰り返し被災。暮らしを脅かす現状に国などの対策が追い付かず、住民は不安を募らせる。(神奈川新聞社・渡辺渉、岩崎千晶)【写真特集】2019年・台風19号 神奈川各地の状況

被災PA「ご利用後は速やかに退出を」

昨年10月の台風19号で被災し、閉鎖が続く西湘バイパス西湘パーキングエリアの売店＝4月、神奈川県小田原市

「ここでおにぎりを買っていくのが基本でね。それができなくなって、本当に困るよ」。西湘バイパス下り線の西湘パーキングエリア(PA、神奈川県小田原市)。今春、オートバイを止めて一服していた藤沢市の男性ライダー(54)が表情を曇らせた。毎週のように出掛けていた箱根へのツーリング。「海を見るとリフレッシュできる」と必ず立ち寄るが、「休憩している時に知り合った仲間が来なくなり、会えなくて寂しい」と交流の機会が失われたことを残念がる。

PAは目の前に広がる相模湾の雄大な景色が売り。しかし、散策できるデッキもあった海沿いのエリア

は立ち入りが禁じられ、おにぎりなどを販売していた売店は閉鎖されたままだ。昨秋の台風19号で高

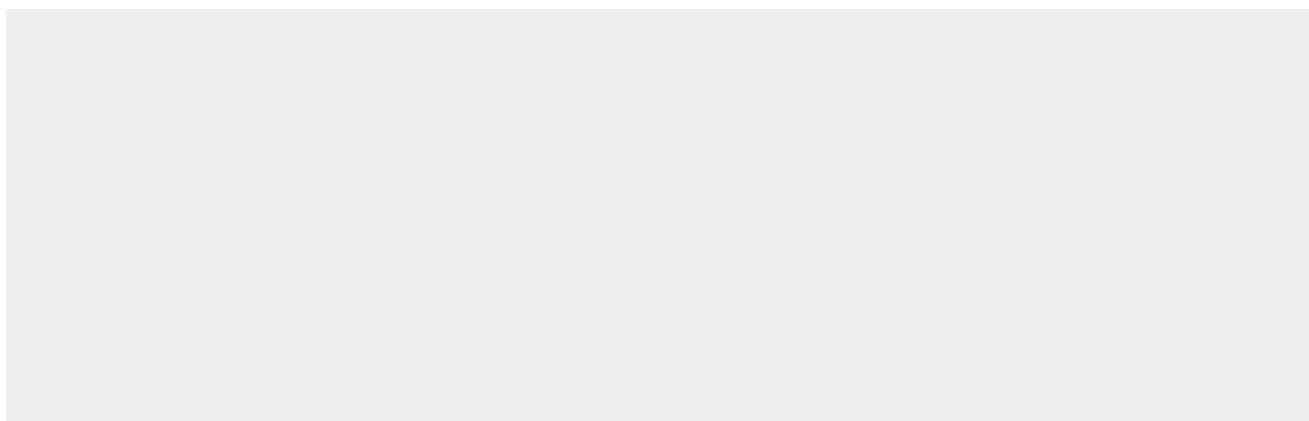
波の直撃を受けたため、本格復旧のめどは今なお立っていない。利用できるのは、被災後に整備

された仮設トイレのみ。ただ、本来の駐車区画の一部を使って設置され、止められる車の台数は大型も

含め 17 台に制限されている。本来の駐車台数の 5 分の 1 以下のため、駐車待ちの車列ができることも少なくない。〈ご利用後は速やかに退出を！〉被災後、PA 内に掲げられた横断幕の目的は、混雑の解消だけではない。この一帯で路面高（海拔 8 メートル）を超える津波が想定されており、発生すれば巻き込まれる恐れが高いからだ。屋上が避難スペースだった売店の閉鎖によって、巨大地震が起きた時の“命綱”が切れたに等しい状態となっている。

「こんなにひどいとは」険しい復旧

「こんなにひどい状況だったとは知らなかった」。4 月の来訪が台風後では初めてという川崎市の男性(59)は、復旧が進んでいない現状に驚いた。「一息つくのにちょうどよい場所なのに。トイレしか利用できないのは困るなあ」



台風 19 号で高波の直撃を受けた西湘パーキングエリア。奥に見えるのが売店（中日本高速道路提供）

売店の閉鎖が長期化している理由について、管理する中日本高速道路は「施設配置の抜本的な見直しを検討しているため」と説明する。PA は抜群のロケーションがあだとなり、高波を伴った台風が相模湾に襲来するたびに被災し、復旧を余儀なくされる悪循環が続いてきた。

12 年 9～10 月の台風 17 号では護岸下の砂が流失し、PA は一時閉鎖。藤沢市・江の島や茅ヶ崎市の海岸なども高波や高潮の被害に見舞われた 17 年 10 月の台風 21 号の際は、PA 海側の

フェンスがなぎ倒され、売店に海水が流れ込んだ。中日本高速道路は当時、「10メートル以上の高波に襲われた」と判断していた。

台風による被災状況

この台風 21 号ではバイパスの大磯町内の区間で路肩などが崩落。その復旧工事が続く中で来襲したのが、昨年 10 月の台風 19 号だった。大磯町から小田原市にかけての西湘海岸沿いに整備され、一日に 3 万台が通行する西湘バイパス。続発する高波被害に海辺の住民は不安を拭えない。高波がいつかバイパスを越え、生活の場に及んでくるのではないか。

いつもは「ザパーン」...あの日は「ドーン」

そうしたリスクが現実の脅威となりつつあることを浮き彫りにしたのが、07 年の台風禍だ。

いつもは砂浜に押し寄せる波の音は『ザパーン』なのに、あの日は『ドーン』だった。橋脚や護岸にぶつかっていたのだろう。海岸からわずか約 50 メートルに住む二宮町の小又寛さん(55)は、迫る恐怖に震えた一夜のことを今も鮮明に覚えている。強い勢力を保ったまま接近してきた台風 9 号。静岡県伊豆半島南部に上陸したのは、07 年 9 月 7 日午前 0 時ごろだった。

「風雨が収まってから海岸を見に行くと、砂浜が削り取られ、バイパスの橋脚がぼろぼろになっていた」被害が集中したのは、西湘 PA から東へ約 6 キロの西湘二宮インターチェンジ(IC、二宮町)付近。繰り返し打ち寄せた高波の直撃でバイパスの擁壁が約 1 キロにわたって倒壊、海側の下り線は一部で路面がえぐり取られ、橋脚の基礎がむき出しになった。被害のなかった陸側の上り 2 車線を対面通行にして仮復旧したのは、約 3 週間後だった。

神奈川県調査によると、被災現場周辺は長年にわたって砂浜が浸食され、戦後間もない 1947 年以降の約 40 年間で最大 35 メートルも海岸線が後退。そこへ来襲した台風 9 号によって推定 40 万立方メートルもの砂が一晩で流失し、さらに 30 メートル分の砂浜が失われた。

かつては野球もできた海岸だった

「自分が小さいころは野球ができるぐらい広がったんだ。今の3~4倍はあったんじゃないかな」。二宮町観光協会の田邊邦良会長(71)は、半世紀以上前の海岸の光景が目に焼き付いている。だが、かつては子どもたちが自由に遊んだ砂浜は、78年に貯水を開始した三保ダム(山北町)の開発や砂利の採取などで酒匂川から運ばれてくる砂の供給を絶たれ、知らず知らずのうちに細っていた。

波消しブロックが数多く積まれている西湘二宮インターチェンジ付近の海岸。奥で突堤工事の準備が進んでいる=6月、二宮町

そして今、追い打ちを掛けるように、危険な台風が次々とやってくる。小又さんは去年の台風を機に、さらに強い危機感を持つようになった。「西湘バイパスはいずれ、復旧できないぐらいの被害を受けてしまうのではないか。根こそぎ持っていかれるようなことさえ起きるかもしれない」

07年の深刻な被災を受けて、国が中心となって打ち出した西湘海岸の砂浜回復に向けた事業は、工法の検討や準備に時間を要し、13年を経てようやく工事が本格化する運びとなった。長さ50メートル、幅15メートルの潜水突堤を約600メートル間隔で6基整備。さらにダンプカーなどで人工的に砂を運び込む「養浜」を組み合わせるという、世界でも例のない手法とされる。予算総額は約180億円。2020年度にいよいよ突堤本体の工事に着手する計画だが、「1基の整備に3年ほどかかる」と国土交通省は説明。地元関係者との会合で対策の効果を問われた際、担当者はこう述べた。「砂浜の回復具合を見極めながら事業を進めることになる。現時点で絶対に効果があるとは言えない」 連載：神奈川のあれから この記事は[神奈川新聞](#)社とYahoo!ニュースによる共同企画記事です。昨年、日本各地で被害を出した台風19号。その被害の実情と復興の過程を、地元メディアの目線から伝えます。